
片 恋

由卯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片恋

【Nコード】

N0149D

【作者名】

由卯

【あらすじ】

彼女は彼に恋をする。彼も彼女に恋をする。そんな二人のもどかし恋心を、お互いの側から描いてみる。二人の恋の行方は…

彼女1（前書き）

ある土曜の朝から、物語は始まる。

彼女1

朝、窓を開けると、霧が白く立ち籠めていた。

普段の日なら、町並みから何かしらの雑音がひしめきあっているが、土曜の朝は、皆、眠ったように静かだ。

白い放射霧の中、太陽はぼんやりと、薄白く輝いていた。

少し冷たくなつた外の空気を深く吸い込みながら、背伸びをする。湿った空気が、肌にまとわりつく。

しばらくすると、寝巻きが冷たくなった。

軽く身震いをし、レースのカーテンを閉めた。

秋も深まると、毎日のように放射霧が立ち籠める。

この分だと、今日も天気良さそうだ。

締め切ったオフィスの中は、パソコンの熱風で次第に暑くなりつつあった。

何十台も並んだパソコンの音だけが、静かな部屋で唸り声を上げている。

整然と並べられた机の一番窓側に、彼の席がある。

今日は、いつもよりもシックな出で立ちだ。

白のボタンダウンのシャツが眩しい。

空調の効かない、空気の籠もったオフィスでは、酸欠状態に陥りそうだった。

自分の机から少し離れた大きめのテーブルで、資料を広げて、訝しそうな表情の彼が見えた。

少し暑いのか、袖を肘のところまで、めくって作業をしていた。

ペンを握る日に焼けた手が、^{たくま}遅しい。

私は、手のひらを火照った頬に当て、軽くため息をついた。

彼女1（後書き）

彼の心は…

【彼1】につづく

彼 1（前書き）

気怠い土曜の出勤。

彼 1

眠い目を擦りながら、ベッドから起き上がる。

時計の針は、今丁度、七時を指そうとしていた。

枕元に置いてあった目覚し時計が、けたたましい音で鳴り始めた。

ライターを擦り、煙草に火をつける。

目覚めの悪い朝の、覚醒剤。

次第に視界が開けてくる。

冷蔵庫から牛乳パックを取り出し、一気に飲み干す。

窓から入る日ざしが眩しい。

今日も天気が良いらしい。

今日は、取引先に出向いての説明のため、小奇麗な格好をしてこいと、主任に言われたのを思い出し、とりあえずクローゼットから白いシャツを取り出した。

アイロンはしていないが、皺加工がしてあると言つことにしておこう。

パンツは無難な黒っぽいやつにした。

「これなら文句はないだろう」と、洗面所の鏡の前で、髭を剃りながら、呟いた。

土曜出勤は、何だか気怠い。

エレベータを下りると、長い廊下の突き当たりにオフィスがある。

ずらりと並んだパソコンが、まるで墓石のようで、少し気味が悪い。席につく前に、案の定、主任に捕まる。

「いいんじゃないの、白いボタンダウン。

タツパがあると、何着ても似合うから、羨ましいわ」

何やら、いつもよりも気合いの入っている主任の出で立ちに、顔が歪んだ。

「今日、行く会社。

あそこ、良い娘が揃っているのよ。

特に、社長秘書。

バイリンガルで、凄い美人らしいわよ」

- やっぱ、主任も一端の男だったってわけですか？

まずはそのお姉言葉を、どうにかしろって話だよ。 -

まとわりつく猫をかわすように、ひらりと身を交わし、自分の席へ向かった。

壁ごしに、ちらりと彼女の姿を探す。

まだ、出社していない。

軽くため息をつき、資料の準備を始めた。

彼 1 (後書き)

【彼女2】へつづく

彼女2（前書き）

朝一番に彼の姿を探すのが、私の日課になった。

彼女2

どうやら、今日は外勤らしい。

どうりでいつもよりシツクな出で立ちだ。

主任がいつにもなくハイテンションなのが、気になる。

机の上で、ごそごそと準備をしながら、隣の席の子にさりげなく聞いてみた。

「今日は、どこにプレゼンなの？」

「外資系の会社らしいよ。」

主任のあのハイテンションぶりを見れば、分かるわ。

結構、いい娘が揃ってると噂よ。

男って、みんな美人が好きなのよねっ」

顔を歪めながら、そういった隣の子の語尾には、殺気が籠もっていた。

準備をする手が、少し震える。

- 彼も、やはり可愛い子がいいのだろうか。 -

不安がどしりと彼女の上に覆い被さり、気分が次第にどんよりとした曇空に変わっていった。

彼のいないオフィスは、蝉の抜け殻がごろごろと落ちている昼下がりが公園ような、そんな寂しさがある。

先ほどの会話が、頭の中を走馬灯のように、ぐるぐると回っていた。些細なことなのに、気にしている自分がもどかしい。

- どおって事ないわ。 -

強がってみても、頭の中は、今朝の話で一杯だ。
頭を冷やそうと、オフィスを出て、長い廊下を歩き、休憩室に向か
った。

偶然、廊下で彼とすれ違った。

主任が何やら嬉しそうだ。プレゼンが成功したのだろうか。
それとも…

重苦しい気持ちで一杯になりそうな気分を紛らわすため、濃いめ
のエスプレッソのボタンを押した。
珈琲の湯気がゆらゆらと上っていく。
いつもよりも珈琲が苦い。

気分で、こんなにも味が違うなんて、初めての経験だった。

彼女2（後書き）

【彼女2】へつづく

彼2（前書き）

プレゼンから帰ってから見た時の、彼女の様子が気になる。

彼2

大テーブルで、資料の準備をしていると、彼女がオフィスに入ってくるのが見えた。

薄手のカーディガンにカットソー。

シンプルながらも楚々とした感じが清潔感を漂わせている。

確か、自分よりも幾つか年上だと、他の女子社員が言っていたのを思い出した。

しかし、あどけなさが残る彼女の笑顔を見ると、自分の方が些か歳を食っているよう見える。

「おはようございます」

明るい挨拶に、心が踊る。

今日も一日頑張ろうと、そういう気持ちで沸き上がってきた。

「やっぱ、外資系は綺麗どころが揃ってるわ」

紅潮した頬で、嬉々と話す主任の顔が面白い。

まるで、シンバルを叩く猿の人形のようにだ。

「ねえ、どの娘が良かった？ やっぱ、社長秘書？」

タツパ的にはお似合いよね」

「タツパ的ですか…でかい同士じゃ、それこそ目立つでしょう。俺、あんまし目立つの好きじゃないし」

「ほんと、つれない男ね」

そう言いながら、会話にならないと悟ったのか、主任はエレベー

ターから見える景色を眺ながら、

「土曜日に出社なんて、面白くも何ともないわ。
早く週休二日制にならないかしら」

ぶつぶつと小言のように呟いた。

・しゃべんなきゃ、結構、いい男なのにな。

そう思いながら、綺麗にプレスされたスーツを眺めた。

この会社に入社して、この人に色々な事を教えてもらった。

今の俺があるのも、この人のお陰だと、感謝すら覚えるけど、この人のハイテンションにはどうしてもついていけない。

時々、若者らしさに欠けると、よくこの人にハツパをかけられるけど、俺は俺のペースでしか動けない。

無理に合わせようとしても、駄目なのは、俺自身が分かっている。

ほんと、この人には、かなわない。

自分はまだまだだと、苦笑いが込み上げてくる。

エレベーターから下りると、彼女と廊下ですれ違った。

ぼんやりとした暗い表情が気になった。

どうしたのだろうか。

彼2（後書き）

【彼女3】へつづく

彼女3（前書き）

休憩室で一人、落ち込んでいると…

彼女3

偶然、廊下で彼と会った。

主任が何やら嬉しそうだ。

プレゼンが成功したのだろうか。

それとも…

重苦しい気持ちで一杯になりそうな気分を紛らわすため、エスプレッソのボタンに手を伸ばした。

珈琲の湯気がゆらゆらと上っていた。

いつもよりも珈琲が苦い。

気分で、こんなにも味が違うなんて、初めての経験だった。

カチツ。

ライターの蓋を開ける音がすると、彼が休憩室に入ってきた。

煙草に火をつける横顔が凛々しい。

彼がこちらにゆっくり振り向くのと同時に、少し背を向けるように、外の景色を眺めるふりをした。

珈琲を持つ手が震えた。

焦る気持ちを隠すかのように、ゆるりと彼に背中を向ける。

しかし、体の全神経は彼の方へ向いている。

珈琲を飲むにも、手が震えてうまく飲めない。

仕方なく、外の風景を眺めた。

窓の外は、無気質なビルが青空に向かって伸びていた。

白い雲が、ビルの窓に映って、緩やかに流れている。

彼の煙草の煙りを吐く息づかいが、静かに聞こえてくる。そんな静寂の中、次第に気が遠のいていきそうだった。

危うく、紙コップを落としそうになるのを制しながら、誰かこの沈黙を壊してくれと、一人願うのだった。

「あら、お邪魔だったかしら？」と、主任が軽い足取りで入ってきた。

私は、安堵と落胆の入り交じった面持ちで、その場を離れようと、おもむろ徐に後ろを振り返った。

しかし、主任の手がそれを阻はばむように、私の前に広げられた。

―早く、この場から、立ち去りたいのに―

私の焦る気持ちとは裏腹に、主任は気にも止めず、独りべらべらとしゃべり始めた。

彼女₃（後書き）

【彼₃】へつづく

彼 3（前書き）

少し日差しの強い休憩室で、彼女は外の景色を眺めていた。

彼 3

先ほどの彼女の表情が気になり、資料をテーブルに置くと、そそくさとオフィスを後にした。
動揺を隠すために、煙草に火をつけながら、さり気なく休憩室に入る。

珈琲の深い香りに混じって、ほんのりと甘い香りがした。
彼女の香水の香りだろうか。

彼女は俺より後ろ斜め気味に立ち、外の景色を眺めていた。
顔の表情は、ここからは見えない。

煙草を吸いながら、彼女の後ろ姿をぼんやりと眺めていた。
このまま時間が止まればいいと思った。

ガラス越しの景色と彼女の影が溶け合うように、昼間の日ざしは強く照りつけていた。
俺は目を細めながら、そんな消え入りそうな彼女の細い肩を眺めていた。

―暑い。

本当に今、11月なのか？―

部屋の空調が壊れているぐらいの暑さを感じながら、額にはうつすらと汗が流れ始めていた。

煙草を吸いながら、この場をどう切り抜けようかと考える。

―やはり、話しかけるべきなのか…。―

そう思いながら、^{くすぶ}煙り始めた短い煙草を消し、彼女の方へと近づいた。

「あら、お邪魔だったかしら？」と、いいタイミングで主任が入ってくる。

俺の顔をちらりと覗き、ずかずかと二人の間に割りこんできた。

主任が入ってきたのと同時に、彼女はきびすを返し、休憩所から出ていこうとしたが、主任の手がそれを遮っていた。

主任が彼女と話している間、気が抜けた俺は、またぼんやりと外の風景を眺めていた。

主任に急に胸を小突かれた時、何が起こったのか察しがつかなかった。

いつものように、独りでしゃべっていたのだろう。

主任が休憩室から出ていったのを見送り、休憩所から出ていこうとした彼女を引き止めた。

彼 3 (後書き)

【彼女4】へつづく

彼女4

目の前を遮られ、動揺を隠せない私は、思わず、

「何か御用ですか」と、

少しきつい口調で、主任の顔を睨んだ。

そんな私の気持ちなどお構いなしに、主任は、

「あんた、暇でしょう？」

今夜つき合いなさいよ」と、

いつもの口調で、突拍子もない言葉を発した。

びっくりした私は、

「主任と二人きりでは、嫌です」と、強く言い切った。

「あんたも言うわね。

皆で行くのよ、もちろんあんたも」と、

彼の胸元を軽く小突いた。

彼の胸元に置いた主任の手を見ながら、胸が高鳴るのを感じた。

「じゃ、そういう事で、隣のカフェラウンジに7時ね」

そう言うと、主任は楽しそうに休憩室から出ていった。

そんな主任の後ろ姿を見送り、休憩室から出ていこうとした時、今度は彼の方から話しかけてきた。

私の心臓は高鳴るところか、その激しい鼓動で破裂寸前だった。

小走りに、半端逃げるように、休憩室を後にした私は、息を荒だてながら、自分の席についた。
赤くなつた頬を冷ますように、両手で頬を包む。

―暑い。口から火が出そうだ。―

そんなことを思いながら、頭を机にうつ伏したまま、暫くじっとしていた。
右の頬を机につけた状態で、オフィスの一番端にある窓から、遠く空を眺めた。
机の冷やりとした感触が、気持ち良い。

緊張の余り、彼と何を話したのかさえ、思い出す事は容易ではなかった。

それほど、私の思考は錯誤していたらしい。
ただ、顔を合わせるのが恥ずかしくて、素っ気ない態度をとったことだけは、脳裏から離れなかった。

―気を悪くしたかな…―

色々考えるたびに、次第に自己嫌悪に陥っていく。
ため息をつきながら、顔を上げると、壁の時計の針は4時を指していた。

―あと、三時間。

こんなことなら、もっとお洒落な格好してくれば良かったな。―

隣の席の子は、いつの間にか帰ったらしい。

改めて、静まり返ったオフィスを一望してみると、出勤している社員は普段の半分もないことに、初めて気づいた。

—そういえば、デートだって、言ってたわね。

5年後、10年後も今のような自分が居たとしたら…—

そう思うだけで、一抹の寂しさに襲われるのだった。

彼女4（後書き）

【彼女4】へつづく

彼 4

「ごめん。今、聞いてなかったんだけど、主任、何、言ったの？」と
申しわけなさそうに尋ねる。

「今夜、 飲みに行きましょうって。隣のカフェに7時みたいよ」と
素っ気なく言って、彼女は俺の前から立ち去った。

―何か、気に触る事、言ったかな？―

もやもやとした気持ちを抱えながら、エスプレッソのボタンを押した。

エスプレッソの香りが、深く、胸の底に沁み込む。

高ぶった心を鎮めるてくれるのを感じながら、俺は静かな午後の一
時を楽しんだ。

オフィスへ戻る途中に、課長と何やら会議をしている主任を見かけ、

―いつもと、全然、表情が違いすぎる。―

と、真剣な面持ちの主任の顔が、変に可笑しかった。
噴き出しそうになるのを必死で堪え、オフィスへ入った。

彼女の姿が見えるように、わざと遠回りをして 自分の席に向かう。

土曜のオフィスはしんと、静まりかえっていた。出勤している社員も、いつもの半分ぐらいだろうか。

「こんな良い天気の日、仕事なんて、つまんねえな」

と、独り言を言いながら、壁に寄りかかって、窓の下を眺めた。車も人通しも、寂しくなるほど少なかった。

腕時計を見ると、4時17分。

―正味、2時間弱というところか。

早く、今日の報告書を書き上げないとな。―

デートの約束をしたような、そんなくすぐったい気持ちになりながら、俺は黙々と仕事を始めた。

仕事が思ったよりも長びき、気づいたら、オフィスには自分一人しか居なかった。

時計を見ると、6時45分だった。

「やっべえ」

帰り支度もそこそこに、鞆に手当たり次第物を投げこんで、廊下を走る。

カツカツと靴の音だけが、暗い廊下に響いた。遠くでエレベーターの明かりだけが、妙に明るく光っていた。

短距離のゴールのテープを切るように、エレベーターに飛び乗った。

小さな箱の中でかけ足をする、ケーブルが切れてしまいそうなので、足の動きを止めた。

「危ない、危ない」

焦る気持ちを抑えながら、エレベーターの階を数える。

「6、5、4…」

エレベーターのベルと同時に表へ走り出した。

「何、焦ってんだろう?…」

急いでいる自分が可笑しくなり、急に立ち止まった。

彼 4 (後書き)

【彼女5】へつづく

彼女5（前書き）

一人暮れなずむ街を見ながら、一人、行き交う人々の流れを眺める。

彼女5

夕暮れ時は、とても懐かしいような、それでもって寂しいような、そんな気分になる。

暮れなずむ夕日が、ビルの隙間に見え隠れしながら、沈んでいく。

疲れた体をソファーに沈めながら、甘めのコーヒーを頼んだ。

ホイップしたミルクの中にキャラメルで花が描かれていた。

「美味しそう」

女の子は、幾つになっても、甘いものに目がない。

お酒が入る前に、ちよつとつまみ食いをしたかったが、時間もなさそうなので、コーヒーだけで、我慢することにした。

暗くなるにつれて、先ほどよりは、人通りが多くなってきたようだ。

行き交う人々は、早足で過ぎていく。

もう外は、夜の帳が落ちそうなほど、空も紫色から暗い夜の闇へと変わりつつあった。

ゆっくりとした夕暮れ時は、またそれも 好きな時間だった。

時間を気にせず、過ごす至福の時間。

世の中が忙しく動いていても、自分の周りだけは、異空間のようにゆっくりと時間が流れていく。

—まるで、デートの待ち合わせのような気分。—

そう思うと、頬がうつすらと上気する。

—こんな時に、彼が来たら…—

ソファーに沈んだ体を、なお一層、深く沈めながら、コーヒーカー
ップに手をかけた。

携帯電話の時計を見ると、6時50分、そろそろ来てもよい頃あ
いだった。

彼の影が、カフェの鏡に映ったのが、ちらりと見えた。
ひと呼吸おくと、彼が扉を開けた。

鏡に映った彼が、迷わず、私の方へ真っ直ぐ歩いてくる。
心臓の鼓動が激しくなる。

彼の手が、肩に置かれ、私は振り向いた。

彼女5（後書き）

【彼5】へつづく

彼 5（前書き）

待ち合わせのカフェで、意外な彼女の一面を見て…

彼 5

ビルから出ると、外は真っ暗だった。

街のイルミネーションが、心なしか寂しげだ。

しかし、昼間からすると、人通りも多くなっていた。

カフェの横を通りすぎながら、彼女がソファ―に腰かけているのが、鏡越しに見えた。

扉を開け、真っ直ぐに彼女の方へ向かった。

彼女の薄く色づいた頬を見つめながら、

―今日は、いつもよりちょっと色っぽい――

などと、至らぬ事を考えている。

こんなに彼女と面と向かって話した事がなかったので、何から話していいのかわからない。

とりあえず、主任達の事でも話し始めることにした。

「主任達、どこで油売っているんだろう」 などと、

当たり障りのない話から始める。

温かいコーヒ―を飲んだせいか、彼女の表情も和らいで見える。

コーヒ―が運ばれ、一口、口を付ける。

かなりきつい酒が喉に流れこんできた。

幾ら甘いとはいえ、このきつさは、空腹には堪^{こた}える。
どうりで、瞳も潤んでいるはずだ。

「これ、かなり酒、きつくない？」

コーヒーカップを指さし 彼女に聞いてみたが、

「甘くて、 美味しいわよ」

と、何食わぬ顔をして微笑んだ。
全然気にしていない様子だ。

以前、カクテルを飲みすぎた女の子を介抱した事が一瞬、脳裏を
よぎった。

――勘弁してくれよ。――

と、心の中で呟く。

酔った勢いで、どうにかなってしまったら、それこそ主任の話の
ネタになりかねない。

あれこれと面白、可笑しく、ある事ない事、言いふらすに決まっ
ている。

それだけは、勘弁してほしかった。

そうこう考えているうちに、時計は7時を回っていた。

コーヒーを一息で飲み干し、携帯をポケットから取り出そうとし
た瞬間、

携帯が震え始めた。

「主任からだ」

待ち焦がれていた恋文を開くように、俺は徐に携帯を開いた。

彼 5 (後書き)

【彼女6】へつづく

彼女6（前書き）

温かいコートで、お互い心が少しずつ溶け合っていく

彼女6

彼は向かいのソファ―に腰かけながら、鞆を床に置いた。
腕時計をチラリと見て、

「何、飲んでるの」と

優しく、私の顔を覗いた。

彼が少し首を傾げて覗いたので、うつむき加減だった事に気づいた私は、平静を保つふりをしつつ、ゆっくりと顔をもち上げ、微笑んだ。

「キリツシュコーヒー」

「それって、甘いやつ？」

俺も待っている間、何か飲もうかな。

オフィスには誰も居なかったけど、主任達、どこで油売っているんだろう」と

訝^{いぶかし}しげな顔をし、少し腰を浮かせて、右手を挙げた。

「これと同じものを、ノンシュガーで」

気づいたウェトレスに注文し、深々とソファ―に腰かけた。

こんな間近で、しかも彼と二人っきりで向き合った事がなかった私は、何を話しているのか戸惑いながら、

―頬が熱いのは、コーヒーに入っているお酒のせいかもしれない。

そう思いながら、ほんのりと色づいた顔で、向かい側に座っている彼の顔を見つめた。

主任からのメールが来たときから、彼の行動がおかしい。何か事件でも起こったのだろうか。

いつも何事にも動じない彼の表情が変わるのを見て、私はなぜだか、少し安心した気持ちになった。

彼の怒ったような表情が、少し可愛く思える。

彼の隠れた一面を覗くことが出来る嬉しさに、優越感を覚えた。

「主任、何て？」

私が口を開くと同時に、伝票を握り、無言で出口へと向かい始めた。

急に立ち上がったので、私はもたもたと身支度を始めたが、振り返った時には、彼は会計を済ませ、外を早足で歩き始めていた。

「待つて」

置いてけぼりをくらった私は、迷子になりそうな子供のように、全身の力を絞って、叫んでいた。そして、走り始めた。

彼女6（後書き）

いよいよ最終話

【彼女6】へつづく

彼 6（前書き）

主任から来たメール、その内容は…

彼 6

読み進めるうちに、携帯を持つ手が、怒りとも何とも言えない感情で、わなわなと震えだしそうだった。

メールの内容は、こうだ。

二人で寛いだ時間を過ごしていることでしょう。
大変申しわけないけど、今夜はよんどころない事情により、行けそうにありません。

取り合えず、7時半にこ洒落たレストランを予約しておきました。
しっかりとエスコートして下さいねっ。

諒より

―誰が、諒なんだあ。

よんどころない事情って、何だよ。―

震える手で携帯を握りしめた。
してやられたという怒りで、頭の中が真っ白になった。

「主任、何て？」

彼女が屈託のない顔で、俺を見つめる。

―ここは場所を変えて、頭を冷やさないと。―

無言で伝票を握りしめ、急いで出口に向かった。
別に急ぐ理由なんてなかったが、何故だかこの場から立ち去りたかった。

重たいドアを開け、表に出た。
ひんやりとした夜風が心地好い。
怒りが次第に薄れていく。

「待つて」

彼女の必死に呼び止める声で、我に返る。
いつの間にか、ずんずんと一人で歩いていたらしい。
カフェの明かりが、だいぶ遠くに見えた。

「何かあつたの？」

息を切らしながら、心配そうに見つめる彼女の顔を眺め、俺は自分の不甲斐なさに呆れていた。

「こんな事で、彼女を手放すのか。
しつかりしろ」

自問自答しながら、俺は腹をすえた。
主任に何と言われようと、構わない。
深く息を吸い込み、心を鎮めた。

「ご免、ちょっと考え事しちゃつて」

俺の表情が柔らかくなつたのを感じた彼女は、安心した顔でこくりと頷いた。
そして、

「今夜はちょっと冷えるわね」

と、肩をすばめる彼女の背中に、俺は左手を回した。
びっくりする彼女の顔を見下ろしながら、

「これで少しは凌^{しの}げる。

さっ、行こうか」

俺は微笑んだ。

彼 6（後書き）

長い間、お読みくださり有難うございました。
「片恋」はまだまだ続きます。

あなたの側にも、ほらっ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0149d/>

片 恋

2010年10月10日10時41分発行